

令和3年度

## 目黒日本大学中学校

## 入学試験問題

## 国語

試験時間 50分

## 注意事項

- 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- この問題冊子は、全14ページあります。
- 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図がありましたら、解答用紙を取り出してください。
- 解答はすべて解答用紙の決められた欄らんに記入してください。
- 試験中に質問がある場合は、手を挙げて監督者かんとくしゃに知らせてください。
- 試験終了後、監督者の指示にしたがって解答用紙を提出してください。
- 解答用紙に、受験番号・氏名を記入してください。
- 解答は、特に指示がないかぎり、句読点や記号をふくむものとしします。

受験番号	氏名



## 一

次の各問いに答えなさい。

問1 ぼうせん部の読みをひらがなで答えなさい。

- ① 精進料理を食べる。
- ② 行方を追う。
- ③ 新時代の担い手。

問2 ぼうせん部のカタカナを漢字で答えなさい（送り仮名がある場合はひらがなで答えなさい）。

- ① テンコウ不良により体育祭は実施されない。
- ② ゲネツ劑ざいを打つ。
- ③ 荷物を受付にアズケル。

二 次の記事を読んで、後の問いに答えなさい。

「わかる」という経験は、脳の中、あるいは肉体内より<sup>①</sup>もはるかに広い場所で生起する。にもかかわらず、自然科学が理性をことさらに強調して、心的過程のすべてを脳内の物質現象に還元<sup>※かん</sup>しようとするので「人の心は狭い所に閉じこめられてしまっている」。岡潔は、このように嘆いた。この身体、この感情、この意欲といえは本来はすむところを人はなぜか、自分のこの身体、自分のこの感情、自分のこの意欲と言わずにはいられない。ところが数学を通して何かを本当にわかろうとするときには、「自分の」という意識が障害になる。むしろ「自分の」という X を消すところこそが、本当に何かを「わかる」ための条件ですらある。

「わかる」という経験の本来の深さを直截<sup>※せつ</sup>に示す例として、岡はしばしば「他の悲しみがわかる」ことについて書いて書いている。

他の悲しみがわかるということは、他の悲しみの情に自分も染まることである。悲しくない自分が悲しい誰かの気持ちを推し量り、「理解」するのではない。本当に他の悲しみがわかるということは、自分もすっかり悲しくなることである。「他の」悲しみ、「自分の」悲しみという限定を超えて、端的な「この悲しみ」になりきることだ。「理で解る」のではなく、情がそれと同化してしまうことである。

私たちは本来、生まれつき他者と共感する強い能力を持っている。一九九六年にイタリアのジャコモ・リゾラツティらがサルの実験で「ミラーニューロン」を発見して話題を呼んだ。サルがたとえば何かものを持ち上げる動作をすると、それに伴って脳の一部分が活動をする。ところが驚くべきことに、その同じ脳の部位の一部分が、他のサルが何かを持ち上げる動作を見ているだけでも活動するのだ。自分が運動をしているときだけでなく、他者の運動を見ているときにも、その運動をさも自分がしているかのように脳が活動するのである。このように、他者の運動を模倣(mirror)する機構が脳の中にあることを、彼らは明らかにした。

ミラーニューロンに関連して、ラマチャンドランという脳科学者が大変興味深い実験を遂行<sup>※すい</sup>した。ミラーニューロンは実は、他者の運動だけでなく、他者の「痛み」をも模倣する。たとえば、目の前の人の手が金槌<sup>つち</sup>で思い切り叩かれるところを見たら、こちらまで思わず手を引っ込めてしまうだろう。目の前の人の「痛い！」という感覚を、見ているこちら側のミラーニューロンがコピーしてしまうからだ。それで思わずこちらも手を引っ込める。が、もちろん、本当に痛いわけではない。

ラマチャンドランはここに着目した。<sup>③</sup>ミラーニューロンは、他者の運動や感覚を模倣する。他人が痛がっているときに、自分が痛いときに活動する脳の部位の一部分が発火している。ならばなぜ、こちらは本当に痛くならないのだろうか。

ラマチャンドランは、手の皮膚や関節にある受容体から「私は触られていない」という無効信号が出て、ミラーニューロンからの信号が意識にの

ぼるのを阻止しているのではないかと推測し、アイディアを検証するためにハンフリーという、湾岸戦争で片腕を失った幻肢患者に協力を依頼した。

幻肢患者は一般に、腕がないにもかかわらず、まだそこに腕があるという幻想を抱いている。ハンフリーの場合は戦争で腕を失っていたのに、顔を触れられるたびに、失った手の感覚を感じていた。

ラマチャンドランはそんなハンフリーに、ジュリーという別の学生を見てもらいながら、ジュリーの手をなでたり叩いたりしてみせた。すると、ハンフリーは驚いた様子で、ジュリーの手がされていることを自分の幻肢に感じる、と叫んだ。

ラマチャンドランの予想通りの結果だった。ハンフリーのミラーニューロンは正常に活性化されたが、それを打ち消す手からの無効信号がないので、ハンフリーのミラーニューロンの活動が、そのまま意識体験として現れてしまったのである。

ラマチャンドラン自身が「獲得性過共感」と名付けたこの現象は、幻肢患者でなくても、健常者の腕に麻酔を打つだけでも再現できることがわかった。麻酔によって、皮膚からの感覚入力を遮断すると、誰もが文字通り、目の前の人と痛みを共有してしまうようになる。

「あなたの意識と別のだれかの意識をへだてている唯一のものは、あなたの Y かもしれないのだ！」とラマチャンドランは印象的な言葉でこの実験の報告を締めくくっている。

この実験は、私たちの心がいかに他者と通い合い、共感しやすいものであるかをまざまざと示している。脳の中に閉じ込められた心があつて、それが環境に漏れ出すのではなくて、むしろ身体、環境を横断する大きな心がまずあつて、それが後から仮想的に「小さな私」へと限定されていくと考えるべきなのではないだろうか。

(森田真生『数学する身体』より)

※還元……戻すこと。

※直截に……はっきりと。

※遂行……やり遂げること。

※受容体……体外からの刺激を受け取り、感覚として利用する器官。

問1 ぼうせん部①「はるかに広い場所」とは何か、本文から十四字でぬき出しなさい。

問2 空らん  X に当てはまる適語を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 限定                    イ 感情                    ウ 経験                    エ 意欲

問3 ぼうせん部②「この悲しみ」とはどのようなものか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 他の悲しみと自分の悲しみの枠を超えて理解しようとするもの。  
 イ 他の悲しみと自分の悲しみの枠を超えて捉えなければならぬもの。  
 ウ 他の悲しみと自分の悲しみの枠を超えて模倣しようとするもの。  
 エ 他の悲しみと自分の悲しみの枠を超えて自然に感じられるもの。

問4 ぼうせん部③「ミラーニューロンは、他者の運動や感覚を模倣する」とあるが、「ミラーニューロン」の活動例として正しいものには○で、

間違っているものには×で答えなさい。

- ア 他人がおいしそうなケーキを食べているのを見て、私も食べたくなってしまった。  
 イ 話をしていた相手が笑ったので、それにつられて思わず私も笑ってしまった。  
 ウ 友達がほめられているのを見て、私も努力しなくてはと思ってしまった。  
 エ 自分のことでもないのに、泣いている人を見て悲しくなってしまった。

問5 ぼうせん部④「幻肢患者に協力を依頼した」とあるが、なぜ幻肢患者に依頼したのか。その理由を説明したものとしてふさわしいものを次の

中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 他者の運動や痛みを模倣するミラーニューロンの働きは、身体ではなく脳からの指示によるものだとか確かめようとしたから。
- イ まだそこに腕があるという幻肢患者の幻想を利用し、その腕から無効信号が出ていないことを確かめようとしたから。
- ウ 健常者よりも他人の痛みを敏感びんに感じてしまうことができるのが幻肢患者である、ということを確認しようとしたから。
- エ 幻肢患者と、腕に麻酔を打っている健常者とはどちらが正確に痛みを感じとれるかどうかを確認しようとしたから。

問6 ぼうせん部⑤「そのまま意識体験として現れてしまったのである」とあるが、どういうことか、説明しなさい。

問7 空らん Y に当てはまる適語を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 皮膚
- イ 能力
- ウ 環境
- エ 判断

### 三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ある朝いつものように練習していたら、ふだんその時間帯には姿を見ることのないキャビアがやってきた。僕の様子をちらっと見た後、胸ポケットに入れてあった一本のバラの花をくれる。手にするまで、それが生花だとは気付かなかった。

「ほら、こうやって頭にバラの花をのせて、手を放すんだ」

キャビアの頭の上で、バラの花はまるで静止しているように見える。

「これが、バランスを取るいい訓練になる。これを一本、君にあげるよ」

実のところ、僕はちよつと気まずい思いを感じていたのだ。キャビアからあれほど熱心にジャグリングの基礎を教わったのに、結局僕は綱渡り師になる道を選んだ。

そのことが、顔に出ていたのかもしれない。

「少年、何をそんなに気の毒そうな顔をしているんだい？」

「だって……」

僕は、その言葉の続きが言えなかった。

「ジャグリングは、サーカス芸の基本だって、前にも僕、言ったじゃないか。つまり、ジャグリングはすべてのサーカスの道に通じているんだ。それに、綱渡りをしながらジャグリングをすることだってできるかもしれない。僕には到底できないけどね」

キャビアが、以前のキャビアと少しも態度が変わっていないくて安心した。それにしても、綱渡りをしながらジャグリングをするなんて、そんな発想、今まで一度もしたことがない。

「それができるようになったら、すごくカッコいいね」

僕は、自分でもわかるくらい、瞳を輝かせた。

「それほどマイナーな芸でもないよ。僕は、地面からエネルギーを吸い取りながらジャグリングをやっているから、地に足が着いていないとダメなタイプなんだ。でも、それとは逆に、地上よりも空中にいる時の方がいいジャグリングをする奴もいる。十人十色さ。だから少年も、少年にしかできない芸を開拓していくんだな。こうして練習をしているうちに、だんだん自分の型みたいなものが見えてくるから。」

いいかい？ ローマは一日にしてならず、って諺があるだろ。サーカスも一緒。何度も何度も練習をして、失敗を重ねて、そこからようやく見え

てくる世界があるんだよ」

僕は、キャビアが教えてくれたバラの花を使った練習方法を何度も試した。これは、広い空間など必要ない。思い立ったら、いつでもできる。バラの花がずっと静止したままでいられるようになると、今度はその格好のままジャグリングをする。

②これは思いのほか楽しかった。それに、体がぶれないせいで、花をのせなかつた時よりもっと長くポールを操ることが可能だ。まるで、自分が機械じかけのオモチャにでもなつたような気分だつた。ぜんまいのネジが回り続ける限り、同じように動けそうに思えた。

そして遂に、それを綱の上でやることに成功したのだ。いったん綱の上に乗ってからやろうとすると今まで通り失敗するけど、地上でバラの花を頭へのせ、更にジャグリングを始めてから綱に足をかけると、意外にも体がぶれずに移動できた。だけど残念なことに、ジャグリングの手を止めてしまうと、僕の体はとたんにバランスを失い、重力の法則に従って地球の中心へと吸い寄せられていく。

ようやく、バラの花ものせず、両手も空っぽにして、それでも綱の上でバランスを保っていられるようになったのは、団長と猛特訓を始めてから、ひと月も過ぎた頃だつた。

僕は常に、頭にバラの花がのつているのをイメージした。団長の言う想像力とは、このことだろうか。それをイメージするだけで、不思議と体の揺れがおさまる。そのまま綱の上で十秒立つていられるようになると、今度はその上でしゃがんだり、また立ち上がったたり、歩いたりする練習を繰り返した。日常生活を送れるまでには、まだほど遠いけど。

練習の成果を確かめるため、団長が久しぶりにやって来た。

「足元を見るんじゃない。常に先の一点を見つめるんだ」

ジャグリングの練習の時も、キャビアから似たようなことを言われた気がする。

僕は、集中して綱の上でバランスを取り、足を一歩ずつ前に踏み出す。そういう時、心は空っぽだ。まるで自分が、ただの器になつたような気持ちになる。一歩前へ、一歩前へ。早歩きよりも、ゆっくりと歩く方が難しい。ちゃかちゃかとネズミのようにすばしっこく綱の上を駆け抜けるのは、案外簡単なかもしれない。けれど、僕はもつと綱の上の空気を堪能したい。だから呼吸を整え、一歩ずつ着実に前へ進むことを心がける。

そんな時、ふとズフラの香<sup>④</sup>を感じる瞬間がある。僕が辿り着こうとしている向こう側の台の上から、ズフラがしなやかに手を差し出し、僕を導いてくれる。バランスを崩しそうになると、さっと僕の横に移動して、きゃしゃな肩を貸してくれる。その瞬間がたまたまなくて、僕は何度も綱の上を往復した。

気がつくくと、指導をしてくれる団長の頭が、綱の上の僕のかかと同じくらいの高さになっていた。僕が知らないうちに、団長が綱を張る位置を

少しづつ上げていたらしいのだ。いつの間にか、綱の感触が足の裏に馴染んでいる。

⑤怖くなかった。正直、最初は膝ぐらいの高さしかない綱の上からでも、落ちるのが怖かった。けれど、綱が高くなるにつれて、不思議と恐怖心は薄らいだ。もともっと高いところまで行けば、やがて重力から解放されると思うと、僕はより高いところに綱を張りたくなる。

無重力の世界まで行ってしまうえば、背中に羽を得たのと同じことだ。落下しようにも、重力が存在しないのだから、僕の体はぶかぶかと宙に浮かんだままになるだろう。そんな空想が、僕を甘い夢の世界へと導いた。

### 【中略】

とにかく一日も早く、ズフラのいる場所へ辿り着きたかった。お祝いをして、時間を無駄にしている場合ではない。

ある朝、僕は団長の目を盗み、綱を、前日より更に高い位置に設置した。もう、梯子を使って台の上に行かなければ、綱渡りを始めることができない。

台の上に立った時、さすがに今までとは見え方が違うと感じた。そんな高い場所でこれから綱渡りをするのだと思うと、体がぞくぞくした。

綱渡りを開始する。まずは右足を前に一歩踏み出す。続いて左足をまた一歩前へ。前に進む時、軸足でバランスを取ったまま、移動させる足の爪先を思いっきり伸ばし、大きく半円を描くようにする。無意識のうちに、そんな歩き方が定着した。

ゆつくりと歩きながら、綱の中央まで移動する。両手を広げてバランスを取っていると、やがて両手は翼へと姿を変え、僕は一瞬だけ、無敵の綱渡り師になる。心は、テントのつぺんから空に吸い込まれ、宇宙の彼方へと旅をする。バランスを保ったまま、左足を後ろに伸ばす。それから更に上体を戻し、片足立ちのまま綱の上に座り、その上であぐらをかく。いつの間にか、こんな芸までできるようになっていた。

けれどこの時、一瞬だけ足元を見つけたのだ。入道雲が湧き上がるように、みるみる恐怖心が僕の心を支配する。気がつくや、テントの隙間から巨大な隕石が落ちてきた。やばい！ このままでは僕を直撃する。

そう心の中で叫んだ瞬間、僕の体は巨大な両手で綱から引きずりおろされそうになり、綱の上でバランスを崩した。なんとか綱を両手でつかみ、その場所に留まろうとしたけどダメだった。

僕は、無様な格好で落下した。すんでのところで、向こうから走ってきた団長に服の一部をつかまれる。けれど、団長といえども僕の体を両手で受け止めることはできず、僕は団長もろとも地面に体を打ちつけた。

「馬鹿野郎！」

尻餅について啞然とする僕に、団長が手を上げそうになる。けれど、叩かなかった。その代わり、僕の目をまっすぐに見据え、こう怒鳴った。

「綱渡りは、高さを競い合っているんじゃない！サーカスは、詩だよ。人間が体で表現する詩そのものだよ。美しい詩の一節に触れたような気持ちをプレゼントするのが、俺達に与えられた仕事なんだ。このステージは、度胸試しをする場所じゃない。高さを競いたいなら、スタントマンになれ！」

興奮しているのか、団長の顔が真っ赤になっている。

「すみませんでした」

本当に、自分が悪いと思った。団長の目を盗んで高さを上げるなんて、馬鹿げている。<sup>⑥</sup>自分の浅はかさが悔しくて、涙が込み上げてきた。それと同時に、麻酔から覚めたみたいに、体の節々で痛みが自己主張を始める。特に、尾てい骨の痛さは、半端じゃない。あまりに痛くて、その場で顔をしかめた。

「立て」

団長が両手を差し出し、僕を立ち上がらせようとする。

「今の落ち方だったら、大事には至っていないだろう。トロが鉄棒から手を滑らせて落下した時は、今とはまるで違って、交通事故みたいなドカンという音が響いたそうだから」

言われた通り、僕はゆっくりと立ち上がった。確かに、骨折などはしていないようだった。立っていると、少しずつ潮が引くように、痛みや痺れが遠のいていく。

「同じ高さでもう一回やってみるか？ それとも」

団長が、僕の目をぎよろりと覗き込む。

「もう一回やってみます」

僕は神妙に答え、梯子に手をかける。ここで止めてしまったら、恐怖心が完全に僕の心を住みかかして繁殖しそうな予感がする。綱渡りが嫌いになってしまいたい。だからこの場で、恐怖心の影を一切追い払ってしまいたかった。

台の上で目を閉じ、呼吸を整えてから、またゆっくりと目を開ける。

僕は集中した。

<sup>⑦</sup> 未来の一点だけをじっと見つめ、ただひたすらにその場所を目指しながら、一歩ずつ足を前に踏み出す。やがて、自分の背中が小さく小さく見えってきた。地球をぐるりと一周して、僕が、僕自身の後姿を見つめている。奇妙な感覚だけど、確かに見えているのは僕の姿だ。片足を上げ、しゃが

み、また立ち上がる。

団長は、僕の足のすぐ下にいる。実際に見えているわけではないのに、気配でわかる。僕と同じスピードで、ゆっくりと歩いている。僕は、未来を見つめたまま、歩き続けた。未来の先に、自分の背中が見える。つまり未来とは、僕自身のこと？

不思議な体験だった。強力な耳栓が外れたみたいに、歓声や拍手が耳になだれ込んでくる。気がつく、僕の体は反対側の台の上まで移動を終えていたのだ。

本当に、自分の背中が見えたこと以外、何も覚えていない。この綱の上を、僕はどんなふう歩いたのだろうか。けれど、みんなが笑顔で拍手を送ってくれている。そうか、僕の綱渡りは成功したのだ。

「よくやった！」

いきなり体が宙に持ち上がった。団長が僕の膝の辺りをぎゅっとなで、僕を地面に下ろしてくれる。そのまま、団長の胸に抱きしめられた。

「いい綱渡りだった」

「ブラボー」

「少年、最高よ！」

方々から、称賛の声が届く。

知らんぷりして、みんなが僕の綱渡りを見守ってくれていたのだ。ひとりで涙があふれ、僕はそれをごまかすため必死で目を見開いていた。団長が、ぶちゅつと僕のほっぺたにキスをする。

その夜、僕は眠れなかった。コックは、隣のベッドですっかり眠りの世界に入っている。最近気づいたのだけど、コックは無呼吸症候群の疑いがあり、寝ていると、時々、完全に呼吸が止まってしまう。でも、だから心配で眠れないのではない。朝の出来事が、僕に大事な何かを教えてくれたようとしていて。それをつかもうと必死にもがいていた。その正体を確かめるまで、僕はどうしても眠れなかったのだ。

何度も何度も、ズブラの綱渡りを思い出した。目を閉じると、彼女の演技が甦ってくる。あの美しさの秘密を知りたかった。そして、ほとんど眠りに落ちる寸前、ああ、そういうことなのか、とやっとわかった。単純なことだった。

ズブラの綱渡り、あれは「死の綱渡り」なんかじゃなかったのだ。ズブラは、死の恐怖と闘っていたのではなく、生きる歓びを全身で表現していた。だから、「生の綱渡り」なのだ。

それに気づいたら、涙があふれて止まらなくなった。いつか自分も、あんなふうに綱の上で自由になりたい。

団長は、サーカスは詩そのものだと言った。そのことが、今なら少しだけ、わかる気がする。僕は、ズフラの綱渡りを間違った目で見ていたのかもしれない。ズフラの演技は、生きることそのものだった。だから、輝いて見えたのだ。

ベッドで横になったまま、僕は早く夜が明ければいい、そして、また綱の上を歩きたいと思った。

(小川糸『サーカスの夜に』より)

※ジャグリング……サーカスの競技の一種。

※マイナー……重要度が低い様子。

※スタントマン……危険な離れ業を専門に演じる俳優。

※無呼吸症候群……眠っている間に、ある一定時間呼吸が止まる症状。

問1 ぼうせん部①「以前のキャビアと少しも態度が変わっていないくて安心した」とあるが、どういうことか。ふさわしいものを次の中から一つ選

び、記号で答えなさい。

ア ジャグリングの基礎を教えてください。僕の様子を見てさりげなくアドバイスをくれたことに、今でも応援してくれている気持ちを感じたということ。

イ ジャグリングの基礎練習を陰で見せてくれたキャビアが、僕自身が気づいていなかった課題を見抜いてくれたことに、感謝の気持ちを抱いたということ。

ウ ジャグリングの基礎練習を自分なりにアレンジしていたところを、以前もキャビアが見てくれていて、そのときと同様にアドバイスをしてくれたことに、親しみを覚えたということ。

エ ジャグリングの基礎を教わったキャビアに、上達していない自分を見られたが、ジャグリングの基礎の大切さに気付かされ、楽になったということ。

問2 ぼうせん部②「これ」とは何をさすか。本文中から十二字でぬき出しなさい。



問8 ぼうせん部⑧「大事な何か」とあるが、それはどのようなことか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 綱の上で自由になることで生きる喜びを選択できるということ。
- イ 人から認められることで美しい演技ができるようになるということ。
- ウ 生きる喜びを自由に表現することで輝けるようになるということ。
- エ 死の恐怖を乗り越えることで輝けるようになるということ。

問9 本文の特徴としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「入道雲」や「テントの隙間から巨大な隕石が落ちてきた」など、具体的な表現により、読み手を物語の世界に入り込みやすくしている。
- イ 「僕」と「ズフラ」とのやりとりをきっかけに、現在の「僕」の心理を冷静に分析し、読み手が自分自身の問題としてとらえられるようにしている。
- ウ 会話を多くすることで、テンポよく物語を進行させ、綱渡りをする「僕」が緊張感をもって練習をしていることを強調し、張り詰めた雰囲気を演出している。
- エ 現実と空想の世界を行き来することで、物語全体を幻想的な世界に創りあげ、サーカスで演じるこの意味を「僕」とともに読み手にも考えさせている。

## 四

次の各問いに答えなさい。

問1 慣用句を完成させるため、①・②にふさわしい言葉を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

・息子の制服姿もだんだんと①ついてきた。

ア 身に           イ 板に           ウ 染み           エ 棒に

・②足を踏ふむ(しりごみする、ためらう)

ア 勇み           イ 蛇だ           ウ 二にの           エ 友の

問2 空らんにふさわしい言葉を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

・自分の功績を男。

ア 取り乱す           イ とりつくろう           ウ ひけらかす           エ いぶかる

問3 四字熟語を完成させるため、空らんにふさわしい漢字を答えなさい。

・阿叫喚(非常に悲惨さんな状況おちいに陥おちいって、叫さけびわめいて救いを求めること)

以下余白







—